The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Herman Cappelen and Ernie Lepore, ”Insesitive Semantics : A Defense of Semantic Minimalism and Speech Act Pluralism”, Basil Blackwell, 2005
Author(s)	福田, 祐二
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 191-196
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11403
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Herman Cappelen and Ernie Lepore, *Insesitive Semantics: A Defense of Semantic Minimalism and Speech Act Pluralism*,

Basil Blackwell, 2005

福 田 佑 二

著者の一人、アーニー・ルポアは、ジェリー・フォーダーの『意味の全体論――ホーリズム、そのお買い物ガイド』（柴田正良訳、産業図書、1997年）の共著者、アーネスト・ルポアその人であり、その他、デイヴィドソン関連の著作などでも知られる。

他方、もう一人の著者ハーマン・カプランは、本書が初の単行本となる。一貫して言語哲学関連の論文を発表し続けており、その多くがルポアとの共著である。本書に続いて、『Language Turned on Itself: The Semantics and Pragmatics of Metalinguistic Discourse』（Cappelen and Lepore 2007）を出版している。現在、セントアンドリューズ大学の教授である。

さて、彼らは本書の目的について次のように書いている。

「本書におけるわれわれの野心的な目標は、文脈感知性（context sensitivity）についての、ほんのわずかな反省で思い至るであろうような単純で素朴な観点を擁護することである。われわれの観点は、自然言語には、容易に特定可能な文脈感知的表現がほんのいくつかだけ存在する、というような具合となる。英語において、それは、「I」「you」「that」「now」などの馴染み深い言葉である。本質的にわれわれの観点は、この「など」の背後には、深遠な謎や隠された驚異は存在しない、というものである」（p.ix）

文脈感知性とは、言語表現の意味がその背景的文脈によって変動する性質のことをいう。たとえば、「私」という表現は、その使用の文脈（具体的には話者が誰か）によってその指示対象が異なる。したがって、「私」は、文脈感知性を持っている文脈感知的な表現である。カプランとルポア（以下「著者」とする）は、この文脈感知的な表現は最小限しか存在しないと主張する。この主張は、現代の潮流とは相容れない。すなわち、彼らが認める以上の表現に文脈感知性を認めているのが現代の潮流である。彼らは、このような立場を文脈主義と呼んでいる。たとえば、「知る」という表現は文脈感知的である、という主張がその典型である（知識の基準は文脈ごとに異なる、という主張）。上で引用した彼らの主張を繰り返すと、彼らは、いわゆる指標詞や指示詞などの典型的な文脈感知的表現と、それに加わる最低限の表現以上に文脈感知的表現は存在しないと主張する（彼らは、これら表現を、文脈感知的表現の「基本セット」と呼ぶ）。彼らは、このような主張に基づいて、「意味論的ミニマリズム」という立場を提案する。

本書の構成は次のとおりである。まず彼らは、彼らの批判対象となる文脈主義の立場を確認する。彼らは、文脈主義に、穏やかな文脈主義とラディカルな文脈主義を見る。後者は、あらゆる表現に文脈感知性を認める立場であり、前者は、この後者と意味論的ミニマリズムの中道を行く立場である。しかし彼らは、穏やかな文脈主義は維持できないと論じる。すなわち、彼らが認める以上の表現に文脈感知性を認めた時点で、ラディカルな文脈主義へと滑り落ちていく。したがって、意味論的ミニマリズムでなければ、ラディカルな文脈主義なのである（以上二〜六章）。その上で彼らは、このラディカルな文脈主義の問題点を次々に指摘していく（七〜九章）。そして、それら問題を乗り越えることのできる立場として意味論的ミニマリズムが提示され（十〜十二章）、最後に、その含意である言語行為多元主義が提示される（十三章）。

著者によると、文脈主義の根本的な誤りは、発話が持つ言語行為内容を意味論的な範疇に組み入れる点にある。

言語行為内容とは、文字通り、とある言語行為が持っているその内容である。たとえば、「九月二十三日は雨だ」という発話行為が、運動会は延期だという言語行為内容を持っているという状況をわれわれは自然に考えることができる。「九月二十三日は雨だ」と発話することで、運動会は延期だという情報が実際に相手に伝わっている状況である。なぜこの内容が意味論的、となるのか。

文脈主義者は、とある表現が文脈感知的であるかどうかを診断する際、われわれの直観を根拠とする。つまり、問題の表現を含む文を様々な文脈に埋め込んで、その真理条件が変動しているように感じられるならば、それを文脈感知的表現と診断する。たとえば、「知る」が文脈感知的であるかどうかを診断する際、彼らは、「私は私に手があることを知っている」という発話を、懐疑論的文脈（哲学的な懐疑論が話題になっている文脈）と日常的文脈に埋め込んで、そ

れぞれについてどのように感じるかを反省する。すると、懐疑論的文脈では、この発話は偽であるように感じられるし、日常的文脈では真であるように感じられる。この直観を素直に受け止めるならば、それぞれの文脈でその真理条件が異なっていることになる。そして彼らはこの直観を実際に素直に受け止めて、「知る」を文脈感知的と診断している。このような方法に頼った文脈感知性に関する論証を、著者は文脈変動論証と呼ぶ。(p.17)

さて、このような直観を尊重するならば、われわれは次のような事態を認めねばならない。すなわち、とある発話の真理条件を司るものは、文脈ごとに変動するその内容、すなわち、ここで言語行為内容と呼んでいる内容である。言語行為内容が真理条件を司るという点からも明らかなように、ここでは言語行為内容が意味論的範疇に組み入れられている。これは、文脈変動論証によって文脈感知性を診断する文脈主義者（著者曰く、文脈主義者は全員この方法に頼っている）が受け入れねばならない前提である。つまり、文脈主義者曰く、意味論は、言語行為内容についてのわれわれの直観も説明できるのでなければならない。(p.53)

しかし、著者の意図する意味論的内容と言語行為内容の区別はいかにして可能なのか。

文脈主義者がこのような区別に失敗するのは、彼らが、言語行為内容の変動性を文脈感知性と捉えているからである。他方で、著者が訴える本来の文脈感知性は、「私」や「いま」のような、基本セットの含まれる表現にしか認められない（すなわち、意味論的内容の文脈感知性）。したがって、言語行為内容の文脈ごとの変動と、基本セットにおける意味論的内容の文脈ごとの変動を直観的に区別できるならば、われわれの直観を切り捨てることなく問題の区別も可能となる。そして、著者はこの直観を刺激する三つの方法を提示している（七章）。ただし、私の直観はそのすべてに納得しない。その辺りも踏まえて、その一つを紹介しておく。

彼らはそれを、文脈埋め込み脱引用間接報告テストと呼ぶ。たとえばある日、太郎が「次郎は明日京都に行く」と発話したとする。この発話を、花子が別の日に次のように報告した。「次郎は明日京都に行く、と太郎が言った」。この報告が間接報告である限り、この報告には間違いが含まれている。なぜなら、太郎の言う「明日」と、花子の言う「明日」は別の日付を指示しているからである。このように、文脈埋め込み脱引用間接報告に失敗する文は、文脈感知的表現を含んでいる。この例では、「明日」がそうである。「明日」は、文脈が違えば意味が違うから、文脈をまたいだ報告にはそのまま使えないのである。

では、文脈主義者が文脈感知的とする「知る」はどうか。「太郎は、太郎に手があることを知っている」という次郎の発話が、別の文脈で、「太郎は太郎に手があることを知っている、と次郎が言った」と報告されたとする。著者は、これを自然な報告と受け止める（p.91 および pp.94-96）。私にはこれがそれほど自然とは感じられないのだが、とりあえず彼らの主張を確認しておこう。

文脈主義者によると、「知る」は、文脈が異なれば意味が異なるのだから、文脈を隔てたこの報告において、オリジナルの意味がそのまま報告される保証はない。むしろ、報告がなされている文脈に順応する形でその意味が形成されるべきである。ならば、「明日」に対してわれわれが感じた不自然さと同じ不自然さをわれわれはここに感じねばならない。しかし、著者曰く、この報告は自然なのである。したがって、ここで文脈感知性は感知されない。これは、「知る」が文脈感知的でない証拠であり、われわれが変動のない意味論的内容を感知している証拠である。したがって、文脈埋め込み脱引用報告テストでわれわれが感知しているのが、意味論的内容である。

しかし、先の「太郎は太郎に手があることを知っている、と次郎が言った」は、われわれがなんらの懸念もなく受け入れる報告だろうか。私としては、これは間接報告であるのだから、それがどういう文脈で述べられたのかということが気になる。場合によってはこの報告を鵜呑みにしたくない[1]。要するに、文脈埋め込み脱引用報告テストは、彼らが思っているほどはっきりと意味論的内容を浮き彫りにはしない。そして、ここでは触れなかった残り二つのテストに関しても同様のことを私は感じる。

このテストの妥当性はともかくとして、意味論的内容と言語行為内容が区別されない場合、どんな問題があるのか。これはいわば、意味論的な相対主義に陥りかねない、ということである。つまり、究極的には、われわれの意思疎通そのものが説明できなくなる。文脈主義者は、発話のその内容を言語行為内容とすることを認める立場であるがゆえに、発話の理解に余りにも文脈的な要素を要求し過ぎる。その場合、文脈をまたがったコミュニケーション（たとえば、インターネットを介したチャット）の成立が余りにもシビアなものとなる（八章）。この問題を根本的に解決するには、言語行為内容とは区別された意味論的内容というものが正しく導入されねばならない。

それでは、意味論的内容とは結局どういうものなのか。彼らの言葉を引用しよう。

> 「文Sの意味論的内容は、Sのすべての発話が共有している内容である。それは、その発話の文脈がいかに異なろうとも、Sのすべての発話が表現する内容である。またそれは、Sの発話が位置している文脈の関連的特徴について無知である人によっても把握され、報告されうる内容である」（p.143）

要するに、「九月二十三日は雨だ」という発話の意味論的内容は、九月二十三日は雨だ、なのである。この内容は、たとえこの発話が、運動会は延期だ、という内容を伝達するとしても、その存在を否定しがたいものである。したがって、この発話が別の文脈で「Aは、九月二十三日は雨だと言った」という具合に報告されたとしても、その聞き手は、九月二三日は雨だという内容を把握する。もちろん、

オリジナルの文脈を共有していないその聞き手は、報告されたその発話が、運動会は延期だという言語行為内容を持っていたことは知りえない。だが、この言語行為内容を知りえないからといって、九月二十三日は雨だ、という発話の内容を把握できないわけではない。

これは余りにもトリヴィアルな主張に感じられるかもしれない。しかし、このトリヴィアルな主張を認め損なうのが文脈主義なのである。

以上の点についても、やはり間接報告に関する部分で、私には承服しかねるところがある。だがその前に、彼らの主張する言語行為多元主義に触れておく。

以上のような仕方で意味論的内容が定位されるとしても、このことによって、意味論的内容と言語行為内容の関係が絶たれるわけではない。つまり、九月二十三日は雨だという意味論的内容が、なぜ同時に、運動会は延期だという言語行為内容を表現するのかが説明されねばならない。そこで提示されるのが、言語行為多元主義である。ただし、この立場は何らかの理論を標榜するものではない。そうではなく、言語使用に関する観察の集合である。そしてその観察の一つが、言語行為内容の決定に体系的な理論は存在しない、というものである。したがって、原理的には、一つの発話が無限の言語行為内容を表現しえる。たとえそれが、意味論的に表現された命題の論理的含意でなくとも、である。つまり、皮肉や詩的表現に代表される、論理を逸脱したような修辞的表現がわれわれのコミュニケーションにおいて通用しうる、という事実の観察を彼らは報告しているのである。（十三章）

さて、間接報告を用いた論証に関して再び物申さねばならない。確かに、「Aは、九月二十三日は雨だと言った」という報告を受けたとき、私は何の疑問もなくそれを受け入れるかもしれない。だがその場合、私はそれを直接報告として解釈している疑いがある。つまり、このような場面で私が感じている自然さなどさしてあてにならない。

そこで、この報告が間接報告であることが明確に感知されるとしよう（この時点で、このコミュニケーションには人工的な不自然さが介入していると思うが）。その場合、私は、「九月二十三日は雨だ」という発話に関してオリジナルの文脈とは独立に何かを理解することを認める。しかしそれは、どの文脈からも独立に、ではなく、何かモデルとなるような典型的文脈に基づいて、なのかもしれない。つまり、意味論的内容ではなく、典型的な言語行為内容としてその発話を理解しているのかもしれない[2]。著者は、意味論的内容は、とある文の発話のすべての文脈に偏在する内容だと言うが、それは実質、実際の文脈とは無関係な形而上学的内容を要請しているのと同じである。このような批判に抗して、彼らは、形而上学的問題が意味論的ミニマリズムだけの問題ではないことを論じる（十一章）。つまり、「九月二十三日は雨だ」というあらゆる発話が共有する抽象的概念や性質のようなものが存在するか否か、という形而上学的問題は、意味論的ミニマリズムに特有の問題ではなく、文脈主義に関

しても同様に問えると論じる。しかし、既に述べたような根拠で意味論的内容のあり方がおぼつかないならば、彼らはその形而上学的問題を直接に引き受けねばならないように思われる。彼らが意味論的内容を確実に提示できるのでなければ、その主張はたちまち地に足の着かないものになってしまう。

そういう点で、私にとって意味論的ミニマリズムは一つの試論のように見える。確かに意味論的ミニマリズムは、文脈主義が抱える多くの問題を乗り越えることができるかもしれない。しかしそれは、飽くまで意味論的内容なるものが厳然と存在する限りにおいてである。ゆえに私は、著者は意味論に新しい展望を与えたが、その課題を後に残した、と評価する。したがって、彼らの意図した目的は果たされていないと思う。とはいえ、彼らは穏やかな文脈主義の維持不可能性を暴き出した。これは、意味論の全体的なプロジェクトの中に自らを位置づけてこなかった文脈主義者たち（典型的には認識的文脈主義者）に、その意味論的含意の自覚を促すものである(pp.7-8)。また、私の指摘する問題点によって、彼らの（ラディカルな）文脈主義批判が無効になるわけではない（ここでは紹介しきれなかったが）。したがって、本書が、文脈主義に関心のあるすべての人にとって有意義な著作であることに変わりはない。

文献

Cappelen, H. and Lepore, E., 2007, *Language Turned on Itself: The Semantics and Pragmatics of Metalinguistic Discourse*, Oxford: Oxford University Press.

1 著者はこのような反論に再反論しているが（p.99）、このやり取りには行き違いがあると思う。

2 彼らは、このような観点（pp.124-125 参照）こそが文脈を越えたコミュニケーションを説明不可能にすると論じる（八章）のだが、私には余り説得的とは思えない。